

【記録例】 令和〇年〇月〇日

No. 2

記録者

〇〇 〇〇

幼児の姿（事実）	◎教師の見取り ☆教師のはたらきかけ
(続き)	
A： Bと言い合いをした後、段ボールの中にもぐりこむ。	☆ Aの視界に教師はいるが、声はかけない。
A： なかなか出てこない。時々、段ボールを蹴って大きな音を出している。	◎ 教師が声をかけ、解決してくれるのをAは待っている。
A： 約10分後、段ボールから顔を出しままごとの様子を時々見ている。	◎ 周りの様子が気になり、出て行く機会をうかがっている。
C： Bや他の幼児は次々とごちそうを作り、教師や友達に振る舞っている。	☆ 「赤い実がほしいなあ。」とAに聞こえるように大きな声を出す。
A： 「ぼく、赤い実あるところ知ってる！」	
段ボールから飛び出し、赤い実を取りに外に行	

(1) 記録を工夫する

幼児を理解し、評価する手掛かりの一つとして、幼児の生活する姿を記録に残すことが必要になる。記録の視点や方法に一定の形式はない。記録を残す習慣をつけるとともに、既成の形にとらわれることなく記録の方法を工夫することが大切である。

例えば、エピソードを記録する方法、週案や日案の用紙を使って記録する方法、個人票や例示した記録の用紙を活用する方法等、記録の目的等も考えながら工夫したい。

(2) 記録から読み取る

幼稚園における評価は、個々の幼児の心の動きや発達を理解することによって、よりよい保育を生み出すためのものである。保育を改善するためには、その記録から何を読み取るのかが大切な意味をもつ。

- ① 個々の幼児の生活の変化を読み取る。
- ② 幼児の姿を生み出した状況を捉える。
- ③ 教師の指導の意図を読み取る。

子どもがどのように遊びを刺激され、教師がその過程にどのように関わったのかが見えるように記録を取り、その記録を蓄積していくことが大切である。

(3) 多くの目で分析・評価する

一人の教師の目に映ったそれぞれの幼児の姿は、幼児のごく一部である。また、教師自身のものの見方や考え方によって、その姿の見え方は違ってくる。多くの目で見たことを重ね合わせることによって、自分には見えなかった幼児の姿や自分の保育の問題点等も見えてくる。教師には、相互に意見を交わし、互いに幼児を見る目を高めていけるような人間関係をつくることが求められている。また、評価の妥当性や信頼性を高めていくことにもつながる。

また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置きながら今日の保育の中で見られた幼児の姿から、ねらいを達成したか、そのために適切な環境の構成や指導が行われたかを評価することが大切である。

(4) 明日の保育を見通す

分析・評価から、明日の保育の流れを予想して、どのようなねらいで、どの場面で、誰に、どのように関わるのか、どのように環境の構成を工夫するのかなど、具体的に計画することが大切である。保育を進めるためには個々の幼児を見る目と集団を見る目の両方が必要であり、集団と個々の幼児との関係を受け止めて、具体的な保育の手立てを考えることが重要である。